

ビジネス関係の仕事を持つムスリム女性に関する調査
—中国義烏市における通訳に務める回族ムスリム女性を事例として—

名古屋大学 李之易

本研究で取り上げる回族女性に関しては、1980年代、中国におけるジェンダー学の発展と共に、研究成果が発表され始めた。文化人類学のアプローチからの先行研究を見ると、今まで30年の間で、女性の社会進出は回族女性を調査対象とし、回族集住地域におけるフィールドワークに基づく研究の重要なテーマの一つである。それらの研究の重要性は否定するべくもないが、その議論には、2つの傾向があったように思われる。

一番目は、世俗主義的な主流社会における市場経済の発展は自動的に女性に一定の社会位置を付与したり、ジェンダー関係に変化をもたらすという指摘である。二番目は、回族のジェンダー構造に大きな影響を与えているイスラーム的なジェンダー秩序が、単に上から信徒に押し付けられる教条的なものとして扱われ、女性の行為を秩序に「服従」か「抵抗」かという二項対立の図式の中で検討する傾向である。そのような議論は、実際に、社会構造を注目する一方で、女性自身がその構造についてどのように理解し、そのなかでいかに行動しているかという女性の経験を看過している。ジェンダー秩序がミクロなレベルでいかに再生産されるか、女性が構造内でどのような制限を受けているか、女性の実践が構造に動きかけることが可能であるかといった問題は十分に検討されてはこなかった。

本研究はグローバリゼーション、イスラーム復興、そして世俗主義的な中国社会における経済発展といういくつかの局面が交錯する状況を視野におき、ビジネス関係の仕事を持つムスリム女性の実践と語りに光を当て、そこから複雑な社会背景におけるムスリム女性の主体性を検討したい。そのため、中国義烏市で通訳として働いている回族ムスリム女性を研究対象として、第一に、年齢、社会層、学歴、婚姻状況などの女性たちの基本的なデータとその特徴を明らかにし、また義烏市の女性ムスリム雇用の実態を提示する。第二に、イスラーム的ジェンダー規範への回帰と世俗社会の市場経済の発展という交錯の背景に注目し、通訳であるムスリム女性は男性宗教エリートからの非難、そして激しい市場競争をもたらすストレスという二重の抑圧に置かれた。それに対して、イスラーム的な男女平等、そして主流社会で流通している男並みの男女平等という言説領域において、女性自身が自らのおかれた立場をどのように理解し、その中いかに「ムスリム女性」としての自己を構築しているのかを考察する。